

万葉集部立の論

—挽歌への道—

高崎正秀

周知のとおり、『万葉集』には、三つの大きくて重要な分類——雑歌・相聞・挽歌の、いわゆる三大部立がある。まず注目すべきことは、このうちの雑歌が、必ず巻頭をしめる点。こんにち、ものを分類する場合、類別しにくいものをひくくめて最後に束ねて「雑」の部とすることが一般であるのに、『万葉』では雑歌を巻初にすえていた。この点に関する不審から、従来も、たとえは巻首脱落説——もつと前に重要な部類が存したのが欠落して、偶然に「雑」の部が初頭に位置したのだろうとか、逆に、雑歌竄入説——「雑」の部というものがもともと古写本の目録にはないから、あとでまぎれこんだ部分だろうとかいう意見が栄えた。

しかし、折口信夫先生は、この部立構成をそのまま認めて、雑歌の巻頭をしめる理由、およびその意義を明確にされた。かつて雅楽寮では、シナ以来の「文武之正舞雅曲」ならびに「雑楽雜舞」というふうな分類法をおそっている。武器を持って舞うものが武舞で、武器を持たないのが文舞だが、このようなシナ伝来の正式の舞曲が「文武之正舞雅曲」で、それ以外のものはすべて「雑楽雜舞」にはいる。日本にも、「——歌」・「——曲（振）」と称せられる神代以来の由緒ある舞曲が、雅楽寮内の日本音楽部ともいふべき大歌所で管掌されていた。これらは、いずれも宮中の正式な神祭りや儀式に演奏された伝統ある重要な舞曲だった。ところが、雅楽寮当局が踏襲する右のごときシナ風

の分類基準によれば、これらも当然「雑樂雑曲」にされるほかない。必然的に、これらの舞曲に合わせて歌う歌も「雑歌」とよばれることになり、かなりの期間にわたり雅樂寮の楽人のあいだでそうよびならされてきたものらしい。何よりも伶人・楽人達が、ほとんど帰化人の子孫であったことを考慮に入れる必要があった。やがて『万葉集』が編纂されるにあたり、そのままの呼称が採用されたわけだが、もともと古来からのわが国根生いの正式舞曲だから、他の部立に優先せしめなければならぬはずである。したがって名称は「雑歌」でありながら、その内容は公的色彩の濃厚な、しかももつとも神聖かつ重要な宮廷儀礼歌で、他の部立に先行するのが当然である——、というのが折口説の大体であった。も一ついえば『万葉集』の成立には歌御所（↓大歌所—万、巻第六）の影響が極めて大きく深いということがある。

二

「雑歌」は、こうして他の部類に先がけて巻初をしめているが、巻一は雑歌のみで構成され、つづく巻二は相聞と挽歌とでなりたつ。このことは、真正な雑歌の存立意義をふまえていえば、巻一・巻二が一グループを形成している証左でもあろう。

巻一雑歌の最初は雄略天皇御製歌、巻二相聞は仁徳天皇の皇后磐姫の御歌がトップ、そして挽歌の劈頭は有間皇子の歌がしめている。このことも『万葉集』の本質を探る重大な意味をもっていた。いずれも著名な長短歌だが、雄略天皇御製にしても、磐姫皇后御歌にしても、ご自身で詠唱されたものだという証拠はなにもない。とりわけ磐姫作歌の一首は、『古事記』に異伝が存し、『万葉』本文の左註にも疑いを残しているところ。雄略御製も、なにしろ古い時代のこと、そう伝えているというだけで確証があるわけでは毛頭ない。いきなり、野原で遊んでいる処女に向かって声をかけるような積極的で大様な性格は、いかにも雄略天皇らしくてよい、といつてこの歌を大いに推奨するむきもある。なるほど、記紀をひもとくと、雄略天皇には出たとこ勝負の奔放・ユーモラスな言動がめだつ。三輪川における引田部赤猪子との交渉などはその尤なるものといえよう。いちにち、三輪川へ出御のおり、川のほとりで布を洗う童女に遭遇する。美しい処女だった。童女の家を問い、みずからも名告られたであろう、やがて宮中に召すむねを約

して還御された。以来、赤猪子は結婚せずに宮廷からの使を待ちつづけて八十歳を経たという。天子はその約束を全く忘れていたのである。姿体瘦萎の老婆が、突如、天皇の御前に名告り出て驚かせたとある。気が長く恐ろしく愚直なること聖者に近い——謂わば後の『源氏物語』の末摘花の先行型である。約束してから八十歳を経るまで天皇のお沙汰を待ったというのは、昔話などにさかんに用いられるいわゆる大話で、人々を笑わせる古くからの話術の一つだった。雄略帝にはこのようなユーモラスな逸話が多い。それで、この『万葉』巻頭歌も、帝に類似のエピソードが多いので、自然に結びつけられたものだろうとされている。私は、この歌を春の野遊び——若菜摘みの行事であろうと推定している。のちの初春「子日の小松曳」という行事に連なる儀礼歌だ。歴聖ひとしく春の野に出御され、みずからも清新な若菜を摘む儀式があり、雄略天皇もそういう場に臨まれたこともあったかも知れぬ。つまり「明日よりは若菜つまむと標し野に……」（万、巻第八）から、光孝天皇「……春の野に出て、若菜つむ我が衣手に雪は降りつ」に一線を劃するものでなければならぬ。それは歴代すべてについて齋行されるべき聖儀礼だったろうから、当該歌も雄略帝の占有物ではなかったはずである。この歌に雄略天子倭王武の個性を認知しようというのは全くナンセンスなのだ。

一方、巻二の相聞歌の初めに位置する磐姫皇后は、いわば嫉妬の権化のような女性。そのため、仁徳天皇にお仕える妾・女官達も天皇のお側近くへは行けない。近ずいたことがわかると、皇后は「足母阿賀迦邇 嫉妬」したもうたという。「足母阿賀迦邇」というのは幼児がよくする地団太を踏むこと。一国の皇后ともあろうお方が、子供のように足をバタつかせてくやしがる——。こんな話しぶりも、きつと語部の話術であったかと思うが、嫉妬する女神については古くすでに石長比売の伝承がみえている。不思議と、その後近世に至るまで稗史小説戯曲類には、たとえば岩手御前・岩戸ノ前・岩藤・お岩と、イワのつく女性群が陸続と登場、いずれも気性の烈しい畏るべき存在であった。嫉妬の化身のごとき女性の先蹤はほかにもある。大国主神の後である須世理毘売——スゼルという語は火がプスプス燦ること、木花之佐久夜毘売が火中で出産された火須勢理命の名告りも同轍。須世理毘売も、その名のごとく烈しく嫉妬し大国主神を困惑させた。しかも毘売には石神たる道祖神としての神格が印象されていて一の磐姫といえよう。これらの女性群には、本来、山ノ神とか道祖神（壘神）の荒々しく妬み深い人格が投影しているのである。嫉妬は最も純粹で女性の美德である。嫉妬心の旺盛な妻をもつ男性は、それだけ偉大な人格者だった証拠なのだ、と先師は

これを解決された。ちなみに、嫉妬という感情はこの須世理毘売が他界——根国ネノクニからもたらした道徳であると、古代人は理會していたのだ、ともいわれた。

雄略天皇は、前述のとおり、ほのぼのと心あたたまる恋愛譚をたくさん伝えられた反面、さわめて性格の至純・熾烈な方であった。雄略という諡号はそれを示す。『日本紀』は一方では有徳天皇と讃め、他方では天下の百姓大悪天皇と誹謗したとさえ記している。一方の磐姫皇后もいまみたごとく、凄絶なる嫉妬姫。『万葉集』が巻一の巻首に雄略御製を据え、巻二の巻頭に磐姫皇后の御歌を載せたのは、このことと無関係ではない。魂のもつとも荒ぶる『古代心』の代表者——男女二人を配して、鎮魂歌集としての『万葉集』の意義に重みをつけ、貫禄をもたせたのであろうと折口先生は鋭く道破しておられる。

三

『万葉』巻九がまた雄略御製で始まっている。この巻は雑歌・相聞・挽歌と並ぶが、雑歌の初めが雄略、挽歌の最初が宇治若郎子の宮所の歌であった。また、『万葉』巻三は雑歌・譬喩歌・挽歌が並び、巻四はすべて相聞歌であるが、この巻四相聞の初出が難波天皇の妹の歌だった。巻四の難波天皇の妹、巻九の雄略天皇のあとはいずれも一足とびに岡本宮（舒明天皇・齊明天皇）の御製になる。以後、天智・天武両天皇の御代へとつづく。そのことは巻一の雄略御製のあとと同様であった。かくして、『万葉集』は舒明・皇極齊明・天智・天武の御代が中心で、いわゆる舒明皇統、あるいは天智・天武両皇統の礼讃歌集の意義が確かめられるのであるが、巻一・巻二・巻四の巻首、巻九の巻首および挽歌の劈頭が、いずれもとびぬけて古い仁徳天皇や雄略天皇の時代に関するものばかりである点が無視できない。舒明天皇時代から始まる、いわば△万葉の時代∨・△万葉の世紀∨を祝福し權威づけるために、これらの古い時代の歌々が初めに据えられたらしいことがよくみえる。とりわけ、雄略御製が必ず雑歌の巻頭をしめる理由が、もし先師のいわれたような意味でないとすれば、どう考えたらよいか、今後の研究はかかってそこに存するのではあるまいか。

巻四相聞の難波天皇の妹というのは、難波長柄豊碓宮に都された孝徳天皇の皇妹と解した方が文獻的には通りがよ

いようだが、卷二の磐姫皇后の御歌の内容との類同性などを考慮して、難波高津宮——仁徳天皇の御妹云々というような物語が背後に附随していたらうということを考えないと落着きが悪いようでもある。この歌は卷四巻頭の四八四番歌だが、つづく四八五・四八六・四八七の長歌ならびに反歌は岡本宮天皇御製であった。この天皇がはたして舒明天皇であるか齋明天皇であるかは不明で、『万葉集』の編者も左註で決しかねているのだが、もしも舒明天皇であつて、四八四番歌を孝徳天皇とすれば、序列が不自然になる。ともあれ、かりにこの歌（四八四）が仁徳天皇時代の歌とされていたのであれば、さきの磐姫皇后の御歌とともに、相聞歌の巻初は仁徳天皇の御代から始めなければならぬ理由があつたのではなからうか。これも、折口先生のご見解のような理由でないとすれば、どう考えたらよいのか。われわれの前途はさらに遠く長い。

四

『万葉集』は、舒明皇統・天智天武皇統を祝福讃仰し、歴聖の長寿万歳をと言コトホ寿ぐ鎮魂歌集であつた、というのが折口学の到達した画期的結論である。それは、さまざまな視点から帰納し、あるいは演繹した空前の認識といえるだろう。われわれは、このすぐれた仮説を、真剣に心ゆくまで咀嚼味到し、さらにできるかぎりの裏づけをはたさなければならぬと考へている。

『万葉』卷九の挽歌は宇治若郎子の宮所の歌が始まる。私は、この部分こそ、先師の卓説——『万葉集』は鎮魂歌集であつたという理會を裏つける、重要な存在ではなからうかと思ふ。

応神天皇の皇子女を、『古事記』は二十六柱（実数は二十七）とし、『日本書紀』では二十柱（実数は十九）とする。そのうち、皇位継承にかかわる皇子三柱、大山守命・大雀命・宇遲能和紀郎子であつた。応神天皇は、この三皇子のなかから末弟の宇遲能和紀郎子を皇太子に立てられた。この国では、前々からいわゆる末子相続がつづいてきたものようである。神武天皇も実に四人兄弟の末弟であつた。仁徳以前の記紀では、どの天皇をみても兄王は御位につかれていない。あるいは、これは世界的な現象であつたかもしれない。ある時代、家督は末子が継承する、ということがあつた。

その理由は不明だが、親からみて末子が一番可愛いからだというような説をたてた人もある。これはしかし、あまりにも単純すぎて学問的とはいえないようだ。あるいは、兄から順次成長し独立して、親のもとを離れてゆくから、最後に家に残る末子が家督を相続するのであろうと考えた人もあった。しかし、その後、私どもの教室で勉強していた神谷吉行君が、これにすぐれた解釈の燈をともしてくれた。

かつて東京あたりでは、正月の七日になると門の前の門松をとりのぞき、そのあとの穴に松の先端を一枝折ってさしておく。それをたしかトウサキと称していたと記憶するが、謡曲などにもみえて室町時代にはさかんに使用されていたことばでトブサ・トボサが、やはり木梢とか枝の先端のことであった。東京のトウサキというのは、たぶん遠い先きの方というような民間語源説の意義理合が混入しているのであろうが、なぜ松の枝の最先端を折りとって穴の中へ埋めておくのか、ということが私には不思議であった。『祝詞』の常套句法に、「奥山オノヤマの小峽コノセキに立てる木を、齋部の齋斧イハもちて伐りて、本末モトノスエをば山の神に祭りて、中間ナカマを持ち出で来て、齋鉏イハをもちて齋柱イハ立てて、皇御孫の命の天の御鬘ミカゲ・日の御鬘と、造り仕へまつれる瑞ミツの御殿ミツノミヤ……」というような言辭がみえる。神には、役にも立たぬ木の梢の方とか、掘り起こさなければならぬ根株を残し、奉って、まん中の良いところだけを採ってくるという人間のエゴイズムが窺えて興味が深い。人間の狡猾さ——。考えてみると、葦原アサハラ中ナカ国クニというのと同じ思想だ。いうところの三界思想——天上界ウヘノミヤ（高天原）・地上界チノミヤ（葦原中アサハラナカ国）のうち、どうにもならぬ端ウヘつこの上津ウヘツ国クニ（高天原）・下津国シノミヤを除外して、中心の中津国を占拠しているのが人間であった。これも日本だけではない世界的思考であった。信州諏訪大社の御柱祭は、七年目ごとに行なわれるが、山から縦の大木の中らを伐採し引き出して、ご社殿の四方から一本ずつ立てる。上社・下社合わせて八本必要になる。私は、この御柱を伐り出す儀式を拝観したことがないのでわからぬが、たぶん縦の木の先きを折りとって、根もとのところへ立ててある種の祭儀をとり行なったのちに、まん中の部分を引き出してくるのであろうと推測される。ともかく、このような事実がかなり目につくので、かつて私は古典の樹神——葉守神ハモリノカミを考察して「葉守神考」(『古典と民俗学』所収)を書いたとき、いわゆる「残り物に福あり」という諺に連接するシヤチシヤチ(幸)の信仰の周辺を探って見た。いうまでもなく、シヤチとは『古事記』の海幸彦・山幸彦とか、『万葉集』の得物矢ウケモノヤなどに印象をとどめる、狩獵・漁撈に必要な威力の根元を意味していた。

これには、三信遠の山間地方の獵師仲間や、秋田の鳥海山周辺に本拠をすえたマタギ（獵人）などの伝えたシャチ・シヤチ玉——^{シキツクマ}幸魂の信仰が恰好の確証を与える。前者の地方で「シヤチをつなぐ」というのは、獵師のもつ鉄砲丸は最後まで使い果たさずに、必ず残りの一発をとどめておき、つぎの丸を鑄るときに一緒にまぜることである。いわば新旧靈威の確実な交替を意図する信仰習俗だった。神谷君は、これをさらに発展させ、たくさんの文献や民俗資料を渉獵して、もともと強力清新な靈魂はもの末に宿るといふ信仰の存したことを明証したのである。同君は、これに△末靈信仰△という名を付与し、さらにその内容を深めていく。そして、世にいう末子相続制の意義も、結局同様で、親の威力は末子にこそもともと強力にうけつがれるといふ信仰に存するといふのであった（△末靈信仰序説）。私は、この神谷説を高く評価しているのであるが、はたして師匠のひいき目であろうか。

ともあれ、末子相続が太古以来、宇遲能和紀郎子に至るまで連続とつづいていていた。ところが、神典を信ずるならば、この方から初めてシナの儒教道徳を学んだのであろうか——弟たる自分が兄君をさしおいて天位を踏むことは不遜であるといつて、大雀命に即位をうながされる。記紀ともに、互いに譲り合つて果てしかなかったと伝える。そして、『日本書紀』によると、ついに菟道稚郎子皇子は自殺なさつた。この皇子の死の部分が大変に不可解である。『古事記』はただ自然に早世されたとするす——、この点の齟齬に対する不審などから、史家は皇位繼承にまつわる内乱説を立ててもいい。注意すべき不思議は、さらにその皇子の死の直後にある。菟道稚郎子太子が菟道宮において自死したと聞いて、兄君たる大鷦鷯尊は難波から馳せつけられる。そのときすでに死後三日を経ていたのである。大鷦鷯尊は悲しみにたえず、「標擗ち叫び哭きたまひて、所知知らず。乃ち髮を解き屍に跨りて、三たび呼びて曰はく、『我が弟の皇子』とのたまふ。乃ち応時にして活でたまひぬ。」とみえる。死後三日目に兄君の靈魂呼びい△にして蘇生されたのである。復活した死者は、しばらくこの世にとどまり、一言・二言、交話したのち、また「棺に伏して薨りましぬ。」という。『書紀』のこの部分を読んでいると、なにがなし背すじを冷たいものが走るのを覚える。郎子の死の状況には、なにかただならぬものを感じるのである。この宇治若郎子は、大鷦鷯尊——難波天皇（仁徳）の弟君であつた。さきの難波天皇の妹君のことをそぞろに想起する次第であるが、ともかくもこの弟君の宮所の歌が巻九の挽歌の冒頭に位置していることに注目したい。

そういう点に留意してみようと、卷二挽歌の初頭は、有間皇子の著名な二首であった。「有間皇子の、みづから傷みて松が枝を結べる歌二首」と題詞に明記しているのだから、この二首は明らかに一連のもの。一首目の「浜松が枝を引き結び」というのはもちろん、二首目の「椎の葉に盛る」というのも、結局、行路・前途に対する平安を祈念する道祖神（塞神）信仰に立脚した、神に対する呪的行為を示しているのだ。ところで、この作者有間皇子の最期も尋常ではなかった。おそらく、蘇我赤兄に欺かれたか、もしくは中大兄皇子（天智）と藤原鎌足の策略に乗せられたかのいずれかで、やはり不遇な一生を終えていられる。

卷二挽歌は、有間皇子作歌二首につづいて、長意吉麻呂・山上憶良らが、のちにこの結び松を見て皇子の胸中を察し追悼してよんだ挽歌四首を連ねる。皇子は作者であると同時に、挽歌の対象者としての位置をしめているのである。以下、同じ卷二の挽歌を調べてみる。やはりほとんどの挽歌対象者——被葬者・被追悼者が異常死者だった。

たとえばまず十市皇女の死の周辺——皇女は天武天皇の皇女で大友皇子の妃であった。天武帝と大友皇子（弘文帝）はいくまでもなく王申の乱の仇敵。まさに父と夫の板ばさみで、薄倅の生涯を卒然としてとじられた。『書紀』には「卒然ハハカに病発ヤヒトオコりて、宮中ミヤナカに薨ハせぬ。」とするのだが、いかにも唐突の感をまぬがれない。ひよっとすると自殺されたのではなからうか。自殺なら「経死ワナキシ」という死に方、すなわち首縛クビククリであろう。とにかく皇女は、その人生を全うすることなく急逝された。

つぎには大津皇子。この皇子も実に不遇なご一生であった。持統朝廷に対する謀反の嫌疑をこうむって刑死しておられる。皇位継承にからむ凄惨な政争の犠牲者であった。つづいて、日並知皇子尊や高市皇子尊の殯宮における柿本人麿の長大な挽歌などにおよぶ。ミコノミコトといえは皇太子の意だが、高市皇子の場合、母方の家柄があまり高くないせいで摂政として万機に与えることはあったが、皇太子にはならなかったはずだから、たぶん死後の追尊であろう。日並知皇子尊の方は、文字通りの皇太子。したがって、やがては当然ご即位になるべき立場にありながら、それ以前に亡くなってしまった。高市皇子も相当な年配になっているのだから、日並知皇子の死も夭折というほどの若死

にはなかつたであろうけれども、踐祚をまたずに薨去されたのであれば、めでたい大往生とはいえない訣である。以下、吉備津采女の死や讃岐の狹岑島の石中死人を悼む人麿作歌など。ついには人麿自身の終焉歌——臨死歌に至っている。このように、卷二挽歌をみると、ほとんどといつてよいほど、異常死者・横死者を追撫する歌が集められていることに気づく。

このことは、さらに卷三の挽歌の配列を俯瞰してもいえる。その巻初が有名な上宮聖徳皇子の竜田山の行路病死者への悲傷歌であった。これを、推古天皇二十一年十二月の『紀』には、聖徳太子片岡の地に遊行のみぎり、路傍に臥した飢者に遭遇され、飲食オシヅメを与え着衣を脱いでかけてやられた。自分の衣服をかけ覆つてやりながら「安らかに臥せ」といわれ、長歌一首をお詠みになつたとする。翌日、使者を遣わしてご覧になると、かの人はすでに死んでいたのだ、そのままそこに埋葬された。さらに数日を経て使いの者が行つてみると、不思議なことに死者の屍骨が消え失せて、太子の授けた衣服ばかりが壘んで棺の上に置いてあつたというのである。この死者、実は聖人だつたというのが、太子はその衣裳を再び着用されたと伝えていた。

昔人にとつて、路傍に行き倒れた横死者の死骸にふれることは大変なげがれであり、恐怖であつた。だから、そういうものに行き触れたときには、必ず供養のために自分の着物を脱いでかぶせて通るのである。古く、行路病死者の恥部を草木・花木の枝葉などで覆いかくしてやる習俗ナラヒのあつたことが知られていて、沖繩のいわゆる恥蔽チヒ阪の伝説はよくその事情を示していた。ハジというのは恥処のこと、ピラ・ヒラは阪の意で、いずれも内地の古語と共通。異常死者の、留まつた魂魄の祟りを畏怖し、ひたすら手向けによる死霊の和みをはかつた。いうところの袖もぎ様・袖とり神の俗信も、このことと関連している。神名は、必要不可欠の衣服・布帛の手向けを人がおこたることを牽制している。あるいは、それを忘れたときの神霊のふるまいでもあつた。古来、そのような精霊・死霊・神霊の存する峠や坂が多かつたのである。

卷三の挽歌は、さらに香具山の屍とか吉野川で溺死した出雲娘とかを悼んで詠じた人麿作歌や、恋の悩みで入水イリミヅを遂げたと伝えられる勝鹿の真間の娘子を詠んだ赤人作歌などがつづく。一方、卷九の挽歌群にも同じような横死者を追悼する歌が並んでおり、さきにふれた宇治若郎子の宮所の歌のあとには、足柄の坂における死人をうたつた歌

や、真間手児奈、さらには手児奈と同様に入水自殺をしたという伝説をもつ葦屋アシノヤの菟原処女ウサノイメトメを哀悼する歌などであった。

六

いろいろみていくと、結局、『万葉集』の挽歌は、単なる葬儀の歌ではなく、とくべつ不幸悲惨な最期を遂げた人々の祟りを怖れかしこんで、それを慰撫追悼する意義を荷なっていたのではないか。

不遇な死にかたをした人々の靈魂を畏敬して御霊ミコトといっていた。京都の上御霊・下御霊の二社の御霊社が有名だが、菅原道真公をまつる天満宮なども一の御霊社だった。菅公が神にまつられたのは、学徳の高遠卓さによるのではなく、不幸なるその人生経歴に由来していたのである。異常不遇な死者の怨念を思い、その祟りを忌避すべく、迎えて神とまつりあがめていくいわゆる怨靈信仰・御霊信仰であった。社名の天満宮とか天神様とかは、祭神名の天満大自在天神にもとづく。この神名は、天上に満ち満ちて、自由自在にふるまいたもう天津神、すなわち雷電様の義をあらわす。恐しい雷の来襲こそ、この世に多くの怨みを残して死んだ道真公の祟りなのだと考えるようになって、本来は無関係だった雷神信仰が道真公に付会したのであった。

平穏な大往生を希求する人々の心には、不遇な死者の胸中の無念さが身にしみる。いかにもして、それら御霊の供養・鎮撫をはたさずにはいられないのだ。『万葉集』の挽歌にうたわれた人々の、さまざま不幸を想起するとき、切実強烈な怨靈慰撫の信仰感情の表出を知るのである。挽歌の意義は、必ずやこの御霊信仰に根ざしている。

ところで、『万葉集』の挽歌をみて、かねがね不可解であったのは、天智天皇にはたくさんの挽歌が記載されているのに、天武天皇には比較的少ない。しかも、天武帝の皇子たる日並知皇子・高市皇子に他を圧倒する長大な挽歌をたてまつった柿本人麿が、二皇子の父帝——天武天皇には一首の挽歌もたてまつっていないことであった。人麿は天武帝の挽歌をつくらなかったのか。つくっても偶然に残らなかったのか。天智帝に関しては、大后——倭姫命をはじめ、姓名未詳の婦人・額田王・舍人吉年キトキト・石川夫人イシカワノカミによる、およそ九首ほどの挽歌が載っている。一方の天武帝については、皇后——のちの持統女帝の御歌のみ四首。しかも一書伝来の短歌二首は、正統の善本かどうか疑わしく、古

歌集の長歌（一六二）は崩御八年後のもので（一六〇・一六一）、三首ともく後の切継のあと歴然としている。このア
ンバランスに、もしも理由があるとすれば、それはなになのか。

それが必然なら、私は、単的に天智の挽折、天武の榮光という、ご生涯の明暗に起因しているのではないかを考
える。天智治世における古代史上の汚点、白村江での唐・新羅連合軍を敵にした屈辱的敗戦こそ、天智帝の生涯を暗転
した。国内は混乱し、敵軍の本土進攻が憂慮されるという、文字通りの内憂外患に対処しなければならなかったの
である。天皇は、外敵の来襲こそなかったけれども、国歩多難のつづくなか、四十歳代の若さで崩去される。しかも、
崩後に起こった王甲の乱は、天智皇統の惨敗に帰した。まさに後顧の憂いの多い崩御といえよう。だからこそ、こぞ
って挽歌をたてまつらなければならなかったのではないか。また、残し伝えなければならなかったのではないか。人
麿の「近江の荒都を過ぎし時」の歌は雑歌にはいつているが、実は近江朝廷——天智・弘文帝への挽歌でもあったの
だ。御弟君——天武天皇は、あるいは保守的に、あるいは革新的にと、自在に国史上の多くの大事業を達成して、六
十歳をこした生涯を全うされている。いわば大往生であろう。『日本書紀』によれば、天武帝崩御のおりには、たく
さんの人々がその死を悼む誄詞シユキトをたてまつっているのに、『万葉集』はわずかの挽歌——多分大后の長歌（二五九）一
首しか伝えていなかったのであろう。そして、人麿の挽歌なども存在してよさそうなのに見えておらぬ。これは偶然
かもしれない。あるいは、天武帝崩御のときまでは、天子崩御を悼む挽歌を詠むことを世間が認めるほどに、人麿の技
両声望は高くなかったのでもあるか。とにかく、挽歌を献ずる必要度の、多いのが天智帝であり、少ないのが天武帝
であったといえるのではあるまいか。

こうして、『万葉集』は鎮魂歌集としての意義をもつという先師の指摘は、挽歌の方面からだけでも確かめうるの
ではなからうかと思う。

七

以上、『万葉』の三大部立——雑歌・相聞・挽歌のうち、雑歌・挽歌の意義について瞥見したのであるが、残る相
聞にも本質的に挽歌と近似した性格があった。

周知のこと、『万葉』の相聞歌には、いわゆる恋歌のみならず、それ以外の文字通りの相聞往来・消息往来といった贈答歌としての意義があった。贈答の関係を異性間にかぎってはいないのである。しかし、なんといっても相聞の中心は恋歌であったので、のちに固定して『古今集』以降の恋歌部立となった。

コヒ(恋)ということばは、本来、テゴヒ(手乞ひ)という語の上略語であろう、というのが柳田国男先生のご意見であった。古語に、「手を乞ふ」「手乞ひ」ということばが存し、のちにたとえば相撲のオテオテと称する行為に連接した、いわば相手を乞うて抱擁するという意味であったろうという。男女間の問題としてつきつめれば結婚・性行為を示すのだ。これを折口先生はさらに一步進めて、コヒとは「魂乞ひ」の義とされた。したがって、「手乞ひ」はその一段にすぎぬのだといってよからう。恋とは、異性の魂を乞い取ることだった。相聞とは、結局、お互い同士の魂の交換を意味し、対者の魂を自分のもとに乞い取る歌であった。

人の死にさいしての△魂乞い▽・△魂呼び▽の信仰習俗は顕著である。亡き人を追悼し、できることならもう一度復活蘇生してくれよかしと、ひたぶるの祈りをささげる。挽歌献納もその強力な手段。畢竟は△魂乞い▽信仰にもとづく。それに、さきにもべた△魂鎮め▽の意義を加えれば、挽歌は全き鎮魂歌といえる。してみると、相聞も挽歌も△魂乞い▽歌であり、一方は生者、他方は死者に対するものだった。だから、克明な記録とか伝承とかが存せぬかぎり、相聞歌であるか挽歌であるかの区別がむづかしい。『万葉集』の編者にも類別の不手際が随所に見えて、いわゆる所屬歌の混乱が指摘されているのである。

雑歌という公的儀礼歌に、相聞・挽歌という鎮魂的習俗信仰歌を配して、『万葉集』の面目はいやが上にも高まって、それこそ万葉への光芒を放っているのであった。